

# 朝霧60周年記念誌

東京朝霧山岳会



# 朝霧60周年記念誌



## 1930年代



'32年小松川町、松江町、小岩町、葛西村、瑞江村、篠崎村、鹿本村の3か町4か村が合併して、江戸川区が誕生する。時を同じくして'32年江戸川区平井に、地元の青年達を中心にした「アマチュアキャンプ会」が創設される。地元の青年学校やボーイスカウトが中核となり発展したもので、当初は妙義山をホームグラウンドに活動を行っていた。その後会員数も増加して、活動が登山中心になった為に、'34年名称を「東京朝霧山岳会」と改称する。

## 1950年代



東京大空襲で会の本拠地平井周辺は、一面の焼け野原と化してしまった。出征会員達が戦死したり、行方不明になってしまったり、また装備、文献の一切を焼失してしまう等のこともあり、会は殆ど壊滅状態に陥った。しかし、終戦と共に再び朝霧は活動を開始し、西丹沢、谷川岳、穂高等の岩場で技術面の研鑽をはかった後、佐梨川奥壁、七滝沢奥壁、武甲山北壁、越沢バットレス等の開拓を行い、岳界に記録を発表するまでに回復した。

## 1970年代



会員の層も幅広くなり、より困難な登攀を追求する一方で、女性だけによる冬期南アルプス合宿等も行われるようになる。また、60年代から続いた海外遠征への指向は、より一層強いものとなり、'71年インドヒマラヤへの主要メンバーの派遣を経て、'76年カラコルムに待望の会遠征隊を出すに至る。また国内でも、冬合宿に剣岳八ツ峰から小窓尾根へのロングルートを取り上げる等ヒマラヤを想定した中堅育成山行も計画されて行った。

# の あ ゆ み

## 1940年代



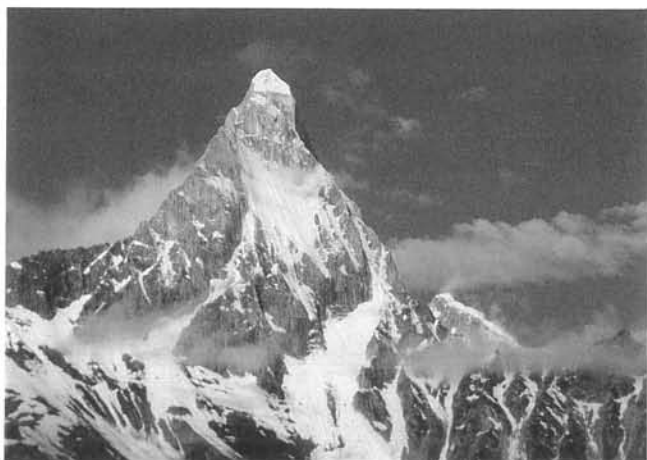
第二次世界大戦の勃発で生活物資は窮乏を極め、登山者は非国民扱いされんばかりの状況になった。会員達は風呂敷包にザイルを隠し持ち、平服姿で山に向かわねばならなくなった。戦火の拡大に伴い、軍部の眼も厳しくなった為に、止むなく会名を「朝霧歩行練成会」と改称し、登山活動の続行をはかる。またこの時代には、陸軍戸山学校の人工岩場で特殊部隊を対象にして、当会がロックライミングの指導すること等もあった。

## 1960年代



'55年、リーダー会のメンバーが一挙に退会して山学同志会を作る等の出来事があり、会の組織は混乱する。しかし残ったメンバーはここが勝負と、岩壁の初登攀争いに参入して行った。結果、積雪期初登攀9本、同第二登2本、同第三登1本、ルート開拓5本、ゲレンデ開拓4本等の成果を挙げた。反面、幕岩Aフェースで3名の墜死等の事故もあった。海外遠征はこの頃から現実化し始め、'67年のヒンドゥ・ラジ遠征、'68年のカフカズ遠征へと会員を送り出して行った。

## 1980年代



'82年のカラコルム遠征を境に、会の長期目標に向かっての山行は少なくなり、代わって個人の価値観に基づく山行が多くなる。谷川岳中心だった登攀も、剣岳や甲斐駒ヶ岳へと登攀の対象が広がっていった。また山行形態も多様化して、個人でヨーロッパアルプスに行く者や、山岳団体の遠征隊へ参加してインドヒマラヤ等に行く者も増えて行った。国内でも、富士山からのスキー滑落や大河川本流の遡行等ユニークな山行も行われるようになった。

## 60周年にあたって

東京朝霧山岳会会長 西原 正

「人生わずか50年」とは織田信長の時代に言われた言葉であります。我々東京朝霧山岳会も、今年で創立60周年を迎えることとなりました。ここまで長い期間に亘り会を存続できたのも、ひとえに友好山岳会皆様のご厚情の賜と、会員一同謹んで御礼申し上げる次第であります。

会創立当時の、趣味であれ恋愛であれ個人的なことには何事も厳しかった時代に、山に行かれ数々の実績を残された先輩及び岳兄諸氏の活動は、実に意義深く、また現在の恵まれた環境と較べると雲泥の差があることを感じます。しかし、一般的に文化的活動とは、衣食住の基本的条件が整ってから行われると言われるのに、無報酬、無社会的活動の山登りを衣食住に事欠きながらも行っていったとは、先取の指向があると言ったら良いのか、ただの道楽者、物好きと言ったら良いのか、難しいところではあります。

科学技術の発達と医学の進歩は、我々の平均寿命を世界一にまで引き上げ、巷には70～80才という高齢者が溢れんばかりです。また、企業の定年制も従来の55才から60才にと延長され、労働時間の短縮と余暇の普及は、我々の生活をより豊かなものへと変えています。

また価値観というのも曖昧なもので、いままでは社会的実績等、何をやってきたかが人を判断する重要な基準とされていたものが、現在では趣味やボランティアを含め、個人の資質、人間性を重要視する時代が変わってきています。遊びの中には、それが例えば山岳会のような組織的なものであっても、絶対的な目的、義務がないという自由さがあります。例えば、命を落とすような山に行きたくなければ、そんな山行を計画しなければ良いのだし、そんな山岳会が嫌ならば辞めてしまえばそれで良いだけで、全てが個人の考え方、価値観によって決定されます。個人の考え方、人間性が重要視される現代、このような自由な人間の集まりは大切にしたいものです。

とにかく、我々のような自由人と言うか多様性のある人間というのは、仕事仕事の世の中が、余暇の普及で遊べ遊べの世の中にも変わっても、なんら戸惑う事もなく自然体でやって行けるのがうれしいものです。まさにこれからは、一面で我々の時代でもあるのです。

今回の60周年記念では、現在付き合いの途絶えている旧会員にも連絡を取るよう努めました。式典に参加戴いた方同士がこれを機会に今後どこかで合って旧交を暖める、朝霧の一時期を一緒に築いた当時の仲間を、旧住所を頼りに探し求めて一杯飲む、もちろん旧知の山仲間が集まって皆でワイワイガヤガヤやる、我々の集いには限界がありません。これからもこんなアンフォーマルグループを続けて行きたいと考えています。

60年と言えば、人間に例えれば還暦です。十干十二支の組み合わせでいくと一巡して、また元の一からのスタートという意味です。長いだけで良いというものではありません。この60年を一つの節目として、足元をもう一度しっかりと見直すチャンスにしたいものです。今後も友好山岳会皆様のお力添えをもって、70年、80年と会を続けて行きたいと考えますので、変わらぬご厚情をお願い申し上げます。

## 最近12年間山行リスト

山行年月	山名またはルート名
'81 (S56) 01	穂高岳屏風岩、飛騨尾根
09	甲斐駒赤石沢奥壁ダイヤモンドフランケ
10	北岳ピラミッドフェース～下部、上部フランケ～中央稜ノーマル直上ルート
'82 (S57) 01	甲斐駒滑滝沢～黄蓮谷左俣～赤石沢奥壁右ルンゼ右壁
05	カラコルム ボイオハグール・ドゥアン・アシール I 峰遠征
08	モンブラン山群プチ・ドリユ西壁、剣岳岩登合宿
'83 (S58) 01	穂高岳横尾尾根
11	槍ヶ岳北鎌尾根～船窪岳
'84 (S59) 01	北岳バットレス、北岳～農鳥岳
05	爺ヶ岳北稜～赤沢岳西尾根 2 峰第 1 グラート
10	チェコスロバキア・タトラ山群
'85 (S60) 01	八方尾根～不帰岳
08	剣岳岩登合宿
'86 (S61) 01	槍ヶ岳硫黄尾根
02	甲斐駒戸台川本谷
05	五竜岳 G II 稜
06	足尾ウメコバ沢チャンピオン岩稜
08	一ノ倉沢変形チムニー～奥壁ダイレクト～衝立雲稜第 2 ルート
09	北岳バットレス下部～上部フランケ、ピラミッドフェース
'87 (S62) 01	北岳バットレス合宿
03	一ノ倉沢一ノ沢左稜
05	一ノ倉沢 α ルンゼ右凹状スラブ、穂高岳飛騨岩ノ尾根～コブ尾根
08	剣岳岩登合宿
09	北岳バットレス下部～上部フランケ～中央稜～C ガリー奥壁
'88 (S63) 01	甲斐駒冬期合宿
03	北岳バットレス下部フランケ～第 4 尾根、戸隠本院岳ダイレクト尾根、 一ノ倉沢一ノ沢右壁左方ルンゼ
05	不帰 1 峰主稜～爺ヶ岳東尾根、富士山吉田大沢スキー滑降
08	北ア黒部上ノ廊下～槍ヶ岳、穂高岳中又白谷
10	明星山 P 6 南壁
12	甲斐駒戸台川藪沢双児沢
'89 (H01) 01	槍ヶ岳硫黄尾根、仙丈岳三峰川岳沢
05	東丹沢谷太郎川鳥屋待沢 (遺体発見)
08	インドヒマラヤ バスキーバルバット峰遠征
'90 (H02) 01	槍ヶ岳硫黄尾根
08	利根川本流遡行合宿
10	一ノ倉沢本谷～四ルンゼ
'91 (H03) 01	西穂高岳稜線～奥穂高岳
08	インドヒマラヤ ヌン峰遠征
'92 (H04) 01	中央アルプス奥三ノ沢、前穂高岳北尾根
08	インドヒマラヤ ヌン峰遠征

## ボィオハグール・ドゥアン・アシール I 峰遠征

### ボィオハグール・ドゥアン・アシール峰概史

ボィオハグール・ドゥアン・アシール峰は別名ウルタル峰と呼ばれ、中央アジアとインドを結ぶシルクロードの中国側終点、クンジュラップ峠から70kmパキスタン側に入った地点で、古くから「桃源郷」と呼ばれて交易上の要衝地として栄えていたフンザに位置する。

ボィオハグール・ドゥアン・アシールと言う名前は、1892年にM.コンウェイとC.G.ブルースらにバルティットの村人達が教えた名前「悪魔の馬だけが通れる所」と言う意味だと言うが、現在ではフンザのミールでさえその名前を知らず、村人達はこの山全体を総称してウルタルと呼んでいる。意味は「狭い通り道」ということだという。

この山には、1974年に広島山の会が南面のウルタル谷から偵察に入ったが、その年の8月にフンザは閉鎖されてしまった。5年後の1979年にカラコルムハイウェイが完成すると共に、フンザは再び解禁された。解禁と同時に松山登高会、クラブアルピノ高嶺、ポーランド等の登山隊が、残された7000m級未登峰を狙って登山申請を出した。

1982年幸運にも当会に登山許可が下り、南面ウルタル谷大クーロワールからのI峰アタックを試みたが、残念ながら南面の状態は極めて悪く、敗退に終わった。2年後の1984年I峰は広島山岳会隊によって、大クーロワール裏側の谷から南西稜を辿り初登頂された。残されたII峰は、1986年に日パ合同隊が、又1990年からはウータンクラブが執拗に南面からのアタックを繰り返したが、1991年10月隊長の長谷川氏と隊員の星野氏が雪崩に巻き込まれて遭難死した。現在でもこの山は希少な7000m級未踏峰として残されている。



名称	東京朝霧山岳会カラコルム登山隊
山名	ボィオハグール・ドゥアン・アシール I 峰 (7329m 遠征時未登峰)
メンバー	隊長 植田宗男(34才)、食料 西原正(35才)、会計 渥美直哉(28才) 装備 小林之美(25才)、記録 田村正巳(22才)、医師 鈴木武樹(27才)
期間	遠征期間 1982. 5. 14 ~ 8. 20 登山期間 1982. 6. 4 ~ 8. 12
最高到達点	南西稜上約6000m地点

5/14	植田、西原、渥美、小林、田村 成田空港発	7/15	大クーロワール途中5200mのビバーク地にC2設営
25	首都イスラマバードより陸路でフンザへ向かう	19	ついに大クーロワール突破、南西稜上のコル到着
31	フンザのバルティット村より第1次キャラバン開始	23	大クーロワールのど部で植田、田村雪崩で宙吊り 植田肋骨3本骨折、両足打撲、田村足首打撲
6/ 2	同村より第2次キャラバン開始	27	大クーロワール取付部で西原落石で鎖骨骨折
4	ウルタル谷のカルカ上部3950m地点にBC設営	30	アタックの渥美、田村 状態最悪とC1へ下山
10	ウルタル谷左俣4400m地点にC1設営(実質ABC)	8/ 2	植田、渥美、田村C1より最後のアタックに出発
15	大クーロワール内の5100m地点に工作隊ビバーク 荒天周期に入り終日雪崩となる	5	C2より24時間のアルバイトで16時南西コル到着、 無傷の渥美も高度障害に倒れ、登山を断念
20	荒天の中ビバーク隊収容、雪崩で潰されたBC C再建に下る、C1不足食糧をBCより荷上	7	下降中5000m地点で支点が抜け植田転落、同 4700m地点のC1上で植田雪崩で200m流下 全身打撲、頭部4針裂傷
25	連日の雪崩で上半突破難渋と判断して食糧制限 に入る	12	BC撤収
7/ 8	食糧限界の為バルティット村まで買出しに下る	20	イスラマバードにて遠征隊解散
11	アイスフォール4100m地点で小林落石で膝骨折		





### 我ら海拔0m低地人「桃源郷フンザ」に行く

山の麓に生まれ育ったからと言って必ずしも山好きとはならないようであるが、高い所と言ったら銭湯の煙突と荒川の土手しか思い浮かべないような我ら「海拔0m低地人」にとっては、山とはとにかく絶対的に格好良く、そして遥かな憧れなのである。

首都ラワルピンディーからフンザへは、屋根上に隊貨を満載した満艦飾のバスの旅となった。当初行程が一泊二日の昼夜行では、さぞかし運転手も疲れるだろうと心配していたが、当の運転手はそんな気配は微塵もなく、ミャーミャーいうミュージックと元気のでるタバコとやらで一人トリップしながら、全員の命を唯一の手形に、ラワルピンディー郊外の長閑な緑の世界からインドス河岸の幻想的な茶色の世界へと、我々をいざなってくれた。

フンザだ！茶色の岩山の間にはぽっかりと広がる緑の台地。まさに砂漠の中のオアシスである。そして目指す山「ボィオハグ

ール」は、旧王宮の背後に空高く標高差4500mの岩屏風を広げて聳え立っている。BCはその王宮の遥か奥、カルカ上部の懸垂氷河下の緑の台地に、羊1頭、鶏10羽、6人の東洋人と3人のパキスタン人からなる小さな部落が造られた。

BC上のスラブをワイヤー梯子で越え、落石の巣であるアイスフォールを抜けると二俣になる。I峰南西稜に突き上げる左俣は、下半部がセラック帯で上半部が大クローアールとなっている。セラック帯はまるで迷路だ。C1はそれまでの荒れた氷河からは想像もつかない、周囲を岩壁に囲まれた雪の台地に設営された。ここからは上半部の標高差1400m、氷雪の大クローアールが一望できる。その後ここはなぜかキジガ丘と呼ばれた。

毎日順調にクローワールにザイルが延びて行く。だが中間点下のオムスビ岩辺りからザイルの延びは止まってしまった。ルートが長過ぎるのだが、幕営地がない。しかたなくオムスビ岩からビレーを取り、ツェルトをぶら下げてのデポ兼ビバーク地を作る。しかしこの頃から天候は荒天周期に入ってしまった。連日連夜の大雪崩はクローワールにラビーネンツークを刻み込み、ビバーク地のツェルトも潰されてしまった。また絶対に安全と考えていたBCも、天幕を雪崩で潰された。C1は上部キャンプの食糧を確保する為に、食糧制限に入った。しかしエステサロンでもないのに痩身者が続出するありさまに、背に腹は変えられずとABCからバルティット村までの、危険覚悟の大食糧買出し作戦に出る。だが入山後1ヶ月も経っているのだから、当然下の部落では登頂して来たと思う筈、それではと英語もそこそこでかつ羞恥心の少ない西原、田村の両名を買出し隊として派遣することにする。期待に違わず彼らは、殻付くるみや干あんず等冬眠用かと思えるような食糧を、下の部落で一杯飲ってきたお返しに、せっせと運び上げて来た。

食糧の次ぎに起きた問題は、人手不足と医師不足であった。我々ドクターを除く5名の内3名が別々の事故で骨折した。また負傷者はキャンプ間を移動できないので、ドクターをガッチリサポートして、宿泊往診を依頼した。これに薬不足が加わった。骨折の後に頭部裂傷のケガをした植田等は、鎮痛剤等良い薬は殆ど使われてしまった後で、縫合時も我慢我慢の連続であった。環境というのは面白いもので、負傷者ばかりの中では腕がダメなら足を使い、足がダメなら腕を使って結構補い合うものである。中でも状態の良い者は、人手不足の為に戦列に復帰した。肋が痛いならゆっくり登れば良い。サポートはできる。しかし、その強がりも最後の一人が倒れて幕となった。

撤収下山は、辛かった。口は人並以上に達者だが、個人装備もまともに背負えない者や自力下降もおぼつかない者ばかり、重い物はすべて放棄焼却するしか仕方がない。夢が破れ、心も体もズタズタになって下山した我々をやさしく迎えてくれたフンザは、たくさんの果実と黄金色の麦畑で、もうすっかり秋であった。そして、まさしくそこは「桃源郷」であった。

## 前期 6 年間について

前期 6 年間は、その中間点にあたる 1982 年のポイオハグール・ドゥアン・アシール 1 峰遠征を境に、前半と後半に分けられる。

前半の 3 年間は、1976 年のバインターブラック峰遠征失敗の反省に基づき、会員個人の基本的能力のアップ及び総合的な登攀力の向上をテーマに、1982 年のポイオハグール峰遠征に向けて、山行が重ねられて行った。

山域もそれまでの慣れ親しんだ谷川岳一ノ倉沢、北岳バットレス、穂高岳周辺という岩場から、甲斐駒ヶ岳、奥鐘山、剣岳周辺、松木沢という馴染みの薄い岩場にと広がって行った。季節も夏期から冬期まで、四季を問わずに登られた。会員個人の基本的能力、登攀力が向上するにつれて会員の層も充実し、その結果当然のこととして良い意味でのライバル意識が芽生え、山行も活気のあるものになって行った。この時代のリーダー会は、ある意味では運営に関して非常に楽であった。また用具の進歩は、登山界の流れに沿ったスピードアップした登攀、継続登攀、氷壁及び岩壁での単独登攀等を定着させた。その為、合宿も少人数に分かれたものが多くなった。その一方で女性会員の退会という弊害も生じた。

後半の 3 年間は、遠征が終わり主力会員がごっそりと結婚等で第一線を退いて行ったこともあって、会員の層は極端に薄いものになって行った。それにつれて、山行も散発的になって行った。会は完全な世代交代の端境期に入ってしまった。

この時期のリーダー会は、前半とは対称的に苦勞し、山岳雑誌に会員募集を毎月載せる等して努力したが、成果はそれほどには上がらなかった。この風潮は当会ばかりでなく、都岳連に加盟している各山岳会でも同様なもので、どこの山岳会も実働メンバーの不足に悩んでいた。それでも次のメンバーが育つまでと、残った主力メンバーは自らが中心になって、合宿や個人山行の計画を組んで行った。



### 穂高岳屏風岩東壁下部蒼稜～上部鵬翔ルート～北尾根八峰

1980年12月28日～81年1月5日

メンバー 川内盛雄、山口秀男、渥美直哉

12 / 28 松本～沢渡～横尾

29 停滞、30 横尾～T 4

31 T 4～大テラス

1 / 1 大テラス～鵬翔ルート終了点

2 同終了点～北尾根最低コル～北尾根八峰

3 北尾根最低コル～北尾根八峰

4 停滞、5 北尾根八峰～上高地

大雪の為に積雪は沢渡で 50 cm、上高地で 120 cm もあった。3 人で交代にラッセルを行い、横尾に着いたのは夜の 18 時であった。T 4 尾根は 6 ピッチで突破する。下部蒼稜ルートは快適だったが、順番待ちと落雪とでザイルはなかなか延びない。ハング乗越時には晴れていた空も昼からは吹雪に変わり、最後は夜間登攀となる。3 人共腰を下ろしただけの苦しいピバークとなった。八峰までの登りは、降雪と吹雪の中で、時には胸までのラッセルの繰り返しとなりスピードは上がらない。八峰で天候の回復を待ったが望めず、しかたなく今回の計画を断念する。

我々は、屏風岩東壁鵬翔ルート～前穂東壁都立大ルート～滝谷クラック尾根～槍ヶ岳～硫黄尾根下降というロングルートを計画していたが、余りにも多い雪に予定半分も消化できずに敗退した。3 名共技術、体力、気力が充実していただけない、残念な山行だった。



### 甲斐駒赤石沢奥壁前衛壁ダイヤモンドフランケ

1981年9月13日～17日

メンバー 山口秀男、川内盛雄、田村正巳

- 9/13 広河原～北沢峠～Aフランケ終了点
- 14 ダイヤモンドフランケA白稜ルート
- 15 同B赤蜘蛛ルート～奥壁中央稜
- 16 奥壁左ルンゼ
- 17 摩利支天中央壁独標ルート～下山

ダイヤモンドフランケA～B～中央稜ルートは、山口と若い田村とのペアで登る。A白稜ルートは12ピッチ。恐竜カンテを右より回り込み、間隔の遠い人工ピッチから核心部のジェードルに入る。ここは国内では珍しい振り子トラバース、懸垂、内面登攀が楽しめる。ダイヤモンドB赤蜘蛛ルートは12ピッチ。垂壁、草付、トラバースの支点が少なく、少々緊張させられる。奥壁左ルンゼからは、川内を加えての3名で登る。このルートは甲斐駒ヶ岳というよりも国内を代表する好ルートと言える。フェース、スラブ、クラック、チムニーと内面登攀を主体にして変化に富んだ高度なピッチを提供してくれる。摩利支天中央壁はルートとしては短い、楽しめるルートである。田村は緊張が続いたせいであろうか、最終日にはミスが目立った。しかし場数を踏めば良いリーダーに育つことだろう。

張させられる。奥壁左ルンゼからは、川内を加えての3名で登る。このルートは甲斐駒ヶ岳というよりも国内を代表する好ルートと言える。フェース、スラブ、クラック、チムニーと内面登攀を主体にして変化に富んだ高度なピッチを提供してくれる。摩利支天中央壁はルートとしては短い、楽しめるルートである。田村は緊張が続いたせいであろうか、最終日にはミスが目立った。しかし場数を踏めば良いリーダーに育つことだろう。



### 甲斐駒坊主ノ沢～滑滝沢～黄蓮谷左俣～赤石沢奥壁右ルンゼ右壁

1981年12月27日～1月1日

メンバー 川内盛雄、山口秀男、田村正巳

- 12/27(晴) 竹宇駒ヶ岳神社～黒戸尾根五合目～千丈の岩小屋
- 12/28(無風快晴) 坊主ノ沢～正面尾根下降～尾白川本谷～滑滝沢出合～滑滝沢大氷瀑下
- 12/29(晴→曇→雪→強風雨) 滑滝沢大氷瀑～坊主中尾根～坊主岩ザッテル～坊主岩一般ルート～千丈の岩小屋

12/30(快晴→晴) 黄蓮谷左俣～黒戸尾根八合目(山口はここより下山)

12/31(晴→雪) 川内、田村にて赤石沢奥壁右ルンゼ右壁

1/1(晴) 黒戸尾根を横手へ下山

長い氷のルートに登る事を目標として山行を計画した。坊主ノ沢と滑滝沢の大氷瀑はスケールが大きく、登る楽しさでは特に素晴らしいものを感じた。赤石沢奥壁右ルンゼ右壁は、岩と雪がミックスした好ルートである。しかし今回は登攀時間が4時間30分と、冬期にしては割合に短時間で登れた。



## モンブラン山群プチ・ドリユ西壁 アメリカンダイレクトルート

1982年8月16日～19日

メンバー 小島雄志、佐藤英男（東海山岳会）

8/16 シャモニからグランモンテを經由して北壁岩小屋へ

8/17 停滞

8/18 登攀 取付7:20、最高点18:20、下降終了22:30

8/19 モンタンベールへ下山

天気予報では明日から悪天候になると言うので、一日で登れる所まで登って、後は懸垂下降するつもりで取付く。バンドをトラバースして水の流れているハング(V)を乗越す。連続するクラック(IV)を登り、かぶったワイドクラック(IV+)を越えて、下部岩壁を終了する。左に行き、バンドを右にトラバース(V+)する。いよいよVI級のデュルファーである。非常

に辛い。さらに連続したクラック(IV～V+)を登ると、メリージェードルが見えてくる。しかしタイムリミットだ。ここまで21ピッチ。懸垂下降で下るが、下部岩壁では暗闇の中での下降となった。しかし無事に岩小屋までたどり着く。同時刻に南西岩稜に取り付いていたGHMJパーティは、そのまま登り続けて悪天候に捕まり、ヘリコプターで救出されたと聞いた。

感想：困難かつ素晴らしいルートだった。天気もてば頂上まで行きたかった。



## 剣岳岩登合宿

1982年8月7日～13日

メンバー 川内盛雄、山口秀男、村上正明

8/7 信濃大町～ハシゴ谷乗越～真砂沢

8 源治郎尾根1峰平蔵谷側壁下部中谷ルート

9 源治郎尾根1峰平蔵谷側壁上部成城大ルート

10 ハツ峰6峰Dフェース久留米大ルート

11 剣尾根R4ルート

12 チンネ魚津高ルート～hクラックダイレクトルート

13 下山

剣岳東面で最も美しい登攀ルート、源治郎尾根1峰平蔵谷側壁。その下部にある中谷ルートは変化に富んだ素晴らしいルートである。思わぬ雷雨待ちの2時間も大岩溝上部のトンネル下で一滴も濡れずに過ごせた。上部成城大ルートは山口、

川内の絶頂期を迎えたペアでハイスピードに登る。6峰Dフェースは山口が全ピッチトップを受け持ち、快適に登る。ハツ峰を登り三ノ窓に入る。剣尾根側壁にあるR4は、幾本ものルンゼの中で最大のルートである。ここは全ピッチ川内がトップを受け持つ。安定したフォームからザイルがスムーズに伸びて行く。濃霧の中、剣尾根を登り三ノ窓に戻る。最終日はチンネの中でも最も手ごわい、hクラックダイレクトルートに登る。濡れていてフリーで行けないのが残念だが、高度感はタツプリーである。終了後は山口、村上で剣岳までランニングで登り、昼前には三ノ窓に戻った。後は雪渓でノンビリとくつろいで過ごした。



### 爺ヶ岳北稜～赤沢岳西尾根 2 峰南稜第 1 グラート

1984年 4月28日～5月3日

メンバー 山口秀男、竹之内智

- 4/28 爺ヶ岳東尾根～同2000m地点
- 29 爺ヶ岳北稜～岩小屋沢岳
- 30 赤沢岳第1グラート1ピッチ目
- 5/1 赤沢岳屏風尾根の頭
- 2 停滞
- 3 屏風尾根下降

9日分の荷物を背負い東尾根を登る。とにかく暑い。11時前には2000m台地に到着したが、気温は20℃もある。小冷沢は雪崩の巣である。若い竹之内の希望もあり、初日はここまでとする。翌日北稜に取付き、さしたる悪場もないままに2時間で北峰に立つ。岩小屋沢岳手前で暗くなりツェルトを張

る。鳴沢岳、赤沢岳を過ぎ、スバリ岳との最低コルより大スバリ沢へ下降する。急な「くの字ルンゼ」を登り末端リッジへと出る。降雪の中尾根を登り、1ピッチ目終了のハング下でツェルトを張る。5/1は20mの下降から始まる。ブッシュ、岩稜、雪壁、チムニーとミックス混じりの尾根をザイル8ピッチで通過し、第2プラトーに合流する。更にナイフエッジを登ると、赤沢岳西尾根2峰西峰に出る。降雪の中、屏風の頭に昼過ぎに到着した。5/2は吹雪の為に停滞。5/3は、竹之内は一人下山し山口は吹雪の中スバリ岳に向かうが、途中引き返して屏風尾根を下山する。

今回雪のある時期の爺ヶ岳北稜から船窪岳を計画したが、天候不良の為に途中で中止となった。



### チェコスロバキア ハイ・タトラ山塊

1983年10月2日～15日

メンバー 東京都山岳連盟山岳救助隊

西原正、川原崇、氷見光治、三上好夫、上村勇二郎、安田秀巳、武川俊二、榎本卓司、氷見悦子

東京都山岳連盟遭難対策委員会は、チェコスロバキアのイエメス山岳会と現地ハイ・タトラ山塊で交流会を持った。

ハイ・タトラ山塊は、チェコの国立公園に指定されていて、ゲルラホフスキー峰(2655m)を最高峰に、2500m級の峰々がポーランドとの国境に連なっている。この山塊は、日本では剣・立山と言った感じで、山麓の町スターリー・スモベックの街は、白壁の建物と周囲の針葉樹の緑とが調和して美しい。ここからはケーブルカーが山腹のヒュッテに向かって設置されている。また隣町のロミニカからはゴンドラも出ている。

チェコではアルピニストが登る山とツーリストが登る山が別れていて、ここから登るロミニッキー峰(2632m)は、ツーリストでも登れる山となっている。一般コースは岩尾根に変わり山頂へと続いている。10月と言う季節は、ハイ・タトラ山塊が一面に紅葉する季節で、山腹の草紅葉と山麓の針葉樹が上部の花崗岩とマッチして素晴らしい。またこの山には、一般コースの他にクライミングルートがあり、西面に300mの花崗岩の岩壁を提供している。

ハイ・タトラに滞在したのは10日間であったけれど、現地山岳救助隊との実技研修を中心とした交流会は、得るものが多く有意義なものであった。

## インドヒマラヤ ヌン峰西稜

### ヌン峰の位置と概史

ヌン峰(7135m)はインド、ジャム&カシミール州の主都スリナガールの東部のヌン・クン山群に位置し、この山群の盟主がヌン峰である。隣接峰としてはクン(KUN. 7077m)、ピナクル・ピーク(PINACLE PEAK. 6930m)、ホワイト・ニードル(WHITE NEEDLE. 6600m)などがそびえる。

一般には、ヌン・クンと続けて呼ばれているが、全く別の山である。ヌン峰は別名「セル=塩山」とも呼ばれており、全山雪に覆われたどっしりした三角錐の山で、まさに純白の塩の塊を思わせるような山容でそびえている。隣接する黒々としたクンの岩山とは、対称的である。

この山群への偵察は、1898年イギリス人がグルカ兵を連れて山岳探検と訓練を目的に入ったのが最初で、以後、1902年にはアーサー・ネーブ博士とバートン師が東面のシャフト氷河に入り、1904年にはヒマラヤの探検家として名高いワークマン夫妻がこの山群第三の高峰、ピナクル・ピークに初登頂した。

ヌン峰の初登頂はエベレストやナンガバルバットの8000mが登られた1953年の8月にベルナール・ピエール隊長の率いるフランス隊によって成された。この頃は、スリナガル〜レー間の道路は政治的理由で通行不能となっていた為、アプローチは南面から迫り、ファリダバード谷の上部、4700mにBCを設けてヌン峰西稜より登頂している。近年この山群はアプローチの交通機関の便が良く、また山岳道路が最奥の村まで通っている為キャラバンなしで氷河端のベースキャンプへ入れるので各国登山隊がルート、時期を問わず入山しているのが現状である。



名称	日本ヒマラヤ協会ヌン登山隊1991年
山名	インド・ジャム&カシミール州 ヌン峰(Mt. NUN) 7135m
メンバー	隊長 中岡久(40)、関根孝次(57) 橋本康弘(36)、伊藤守(36) 井上博之(57)、 沢田幸子(50)、田村正勝(49) 滝口良二(42)、 森山英穂(36)、吉岡俊博(31)、中山裕朗(27)、伊藤英世(24)
期間	遠征期間 1991. 7. 7 ~ 9. 4 登山期間 1991. 7. 25 ~ 8. 17

### 行動日程

7/ 7	先発隊2名出発(夜、デリー着)	8/13	第二次アタック隊5名(伊藤含む) 6700mにて敗退
14	渉外業務(通関、装備収集等)本隊着	14	第三次アタック隊3名 13:45登頂
15	デリー出発(バス2台)	15	C4、C2撤収
19	チャンデガール〜マナリ〜レー	18	BC撤収〜カルギル
20	レー滞在(肺水腫3名入院)	19	カルギル〜レー(ラダック)
23	カルギル〜タンゴール(最奥の村)	20	インド国内航空にてデリーへ
24	センチイック氷河下部BC設営	22	観光(ア〜グラ)、市内観光など
29	C1(4900m)設営	23	デリーにて登山隊解散 本隊帰国(9名)
8/ 1	C2(5300m)設営	27	隊荷デポ整理
3	C3(5900m)設営	29	観光旅行(ジャイプール)
7	C4(6350m)設営	9/ 3	デリーより帰国
12	第一次アタック隊3名 6700mにて敗退		



### 「カシミールの貴婦人」ヌン峰に行く

山好きならば一度は夢みる海外登山、これを夢だけに終わらせる山屋さんが多い。情熱不足だのそれほど価値を見いだせないだの、実力不足いろいろあるが実際には、仕事・家庭を口実に決断できず諦めてしまうのがほとんどである。そんなに自分を取り巻く事情が許せないからなのだろうか、たかが2ヶ月位仕事・家庭を留守にしてヒマラヤに行くのにあたふたしてしまうのである。そのプラスの効果は例えば、本格的な山登りの実践、日本を離れ他国の事情を自分のものとしてODA、

PKO問題等を新ためて考えるだけでも大収穫ではないだろうか。ちょっと話がずれたが、実際行動に移してしまうと案外「どうにかなるだろう精神」うまくいってしまうものである。

89年にインド（ヒマラヤ協会主催）に行っているので多少の余裕とさらなる不安の中、先発（2名）で出発。翌日より隊荷の通関とデポ品整理を行う。初仕事はエージェントへ挨拶も兼ね、打ち合せ。その後大使館へ挨拶の電話をいれるが、カシミールでの旅行客殺害事件の件で、自粛を要請される。そのたびに会話が途切れる中、電話の前で何度もお辞儀をしながら切らせていただいた。

7月10日空港近くのエアカーゴへ。待つこと3時間やっと隊荷が出てくる。早くチェックして欲しいのだがそこはインド、なかなか順番が回ってこない。さらに2時間後フルオープンの指示にしたがい開封される。無線機チェックが念入りの他は梱包バンドを切られた程度で終る。翌日暑くホコリばいデポ倉庫で装備を収集。7月14日本隊と合流、先発隊の仕事は終わる。

本来ヌン峰はアプローチが短くデリーから国内線でスリナガルまで飛び、その先バスを利用すればキャラバンなしでセンチック氷河の出合うタンゴールまで入れる。しかし'89年よりカシミール地方を取り巻く情勢が険悪となり、スリナガルの治安が不穏な為、アプローチをマナリ～レーの山岳道路にとる。この道路は5000mを越える高い関嶺をいくつも通過して3日目にレーに入る。さらに2日を費やしてタンゴールに入るのである。BC(4100m)へは村の北斜面を登りセンチック氷河から流れ出る河の側にある。C1(4900m)は氷河を渡った後、左に回り込みアイスフォール右岸のモレーン上とした。アイスフォール帯は300mの登降でクレバスに注意して登る。標高5000mを越えてのだらだらしたスノープラトーは、広大で景色はよいのだが標高が稼げずC2(5250m)までが辛く長い。連日快晴でルート工作、荷上げと順調。C3(5900m)へは直線的な急雪壁がルートで、随所に脆い岩があり落石も頻繁で苦しい登りである。上部露石帯をトラバースしてのクローワールは、ダブルアックスで格好良く登りたい所だが、6000mでは連続10歩が限界だ。

カニのハサミという岩稜を下り、C3のコルに着く。コルはおわん底の地形で昼間は灼熱地獄となるが、朝焼けに染まるナンガバルバットそして遠くK2まで見えてしまう場所である。続いて南西壁の基部に広がる上部プラトーC4(6400m)へは、亀裂が走る雪面からセラック帯、クレバスと変化に富んだルートで最終キャンプC4となる。翌日休養のためC1へ降りる。その後2日間降雪続き、アタックを前に不安を感じる。しかし日程の都合上、降雪の中を上部キャンプへ入る。2日後第一次隊(3名)は4時にC4を出発、悪い南西壁に手こずり6700mにて断念。翌日第二次隊(5名)は昨日のフィックスのお陰で9時に西稜上(6700m)に立つが、稜線の状態が悪く断念、第一次隊は再度のアタックを期し、C4に入る。翌8月14日第三次アタック。快晴の中を南西壁を登り、ナイフリッジの西稜を慎重に登る。朝の交信以来連絡は途絶れたままで不安は増す。ついに、13時45分登頂の一報が入る。ヌンに来て本当によかった瞬間である。翌日より撤収作業となり、フィックスを除くすべての装備を残さないようにした。特に残留ゴミの多いC1は我々が来る前以上に清掃したことが何故か誇らしい。「終りよければすべて良し」と口ずさみながら山を後にした。

## 後期 6 年間について

昭和が終り平成へと移行した時代の中で、朝霧は新人会員不足、主力先輩の結婚そして山離れと恵まれない環境下で平成を迎え、現代に至っている。その少ない会員の中で岩登り、沢登りを中心に四季を問わず広範囲に活動している。

会員の身近な目標としては夏、冬の合宿に向けて、週末山行でも基本技術と単なる岩登りだけではなく、継続登攀や縦走をプラスした総合力の向上を各自に課している。

山域は地域研究のように限定してはいないで、戸隠、妙義山のような人があまりはいらない山で、雪稜登攀、沢登りなどを実践している。なぜマイナーな場所を選定するかというと特に冬などはトレースが皆無であることが理由にあげられる。そこには自分達だけですべてを処理、判断する場が確保されているからである。

また会員のなかにはグレードの高い沢登り、急な雪壁でのスキー滑降など過去の朝霧にはない山行をする者、ヒマラヤ登山を研究・実践する者など、少ないメンバーながらもそれぞれユニークで企画力のある、山行を実践している。しかし会員が少ないのは寂しいことで、山の雑誌に毎号のように募集広告を掲載しているが今ひとつ反響が少ない。最近登山人口は確実に増加しているのであるから、新人の受け入れ態勢が急がれる。

山行ばかりだけでなく隔週行われる集会では、山行報告に先輩の失敗談などが加わり楽しい。また机上講習では、近年ヒマラヤ登山、救助技術、最新装備等をテーマに会員が持ちまわりで研究発表している。会の年間行事で一番盛り上がる秋の「朝霧祭」の準備は、現役会員総出で、2ヶ月前より実行委員会を組織して準備を行なっている。近年は、友人、家族などを含めて50名を越える盛況ぶりである。



### 甲斐駒ヶ岳冬期合宿

1987年12月29日～88年1月3日

メンバー 伊藤守、塚田秀美、鈴木典仁、畠中みどり

12/30～31(戸台川奥駒津沢) 戸台川本谷をつめ氷のないF1、F2を捲く。F2の落口に達すると、頭上には駒津沢F1の見事な水瀑が眺められ奥駒津沢も近い。本日の泊場は大岩下で快適な所である。翌朝は、いきなりF1の登攀から始まる。その後水柱状の滝よりナメ滝が30m続く。F2は結氷が甘い、続いてF3、やっと手ごたえのある滝と

なり、左の垂直部に取付き、上部岩壁に阻まれ滝身中央の雪面を登る(IV+)。いくらかのラッセルでF4。滝は3段で上部はツララ状で最悪(IV+)。この先で右俣に入ると、前衛壁に追い込まれるように雪壁が続く。奥の岩壁を割るような急なゴルジュがある。右支尾根に逃げて、暗くなる頃にビバークサイトに着いた。翌日支尾根を忠実に辿りダイヤモンド奥壁の右稜を登り、駒津峰下に出た。1/1(尾白川黄蓮谷左俣) 甲斐駒ヶ岳頂上を越えて、夕刻に坊主ノ滝下で幕営する。翌朝、坊主ノ滝を登る頃には後続が見えてきたので、急ぎ左俣に入り両側の岩壁が印象的なチムニー滝まで一気に登る。沢は開けナメ滝が連続する。上に青く聳え立つ大滝が見える。高捲くつもりでいたが、登ることとする。左隅の垂直部を登り、中央部へ厳しいムーブの連続、ここは3P、3時間で登りきる(V-)。それより上は疲れた体には応える雪面を登り、夜8時に八合目に出た。1/2(赤石沢奥壁中央稜) 11月にトレースしているので、気楽に登る。アイゼンを付け雪のないクラック、雪壁、チムニー、上部クラックとぐいぐい登って、右ルンゼ源頭に出た。





後立山・不帰1峰尾根主稜～五竜岳G5稜～爺ヶ岳東尾根下降  
1988年5月1日～5日

メンバー 山口秀男、伊藤守、宮浦達也

5/1 猿倉手前から南股に入る。不帰1峰まで高度差1800mの登りだ。奥ノ二股からは雪渓になる。雪渓を割る形で南滝が威圧的だ。この先は雪原となり、1峰尾根主稜が裾を広げている。不帰沢をつめ、P2、P3のコルに上がるルンゼを登り、主稜に立つ。雪稜を100m登ると断崖で、アブミでハングを乗越、雪稜を登り、平坦になった所で幕営する。5/2朝から雨である。上部ブッシュ帯は2ピッチで、1峰頂上に出た。五竜岳へ向かい歩き、昼過ぎに五竜山荘到着。明日の天気は良いが、明後日は悪天と思われるので、鹿島槍北壁はあきらめ五竜岳G5稜を登る事にする。5/3朝、白岳沢を下る。ルートはC沢よりG5稜に食い込むルンゼである。この先は亀

裂が走る雪面を進む。雪壁を前にザイルを付けて直上し、雪の割れ目に沿いキノコ雪下へと進む。キノコ雪の基部を通るのだが頭上の庇が崩れそうである。次ぎは核心部の不安定な雪壁である。ハーケンを打ちながら進み、その上で雪壁を登る。上はハイマツ帯で、上部に向かう氷雪にアイゼンを蹴り込み登った。上の露岩にハーケンを打ってビレイする。露岩と最後の雪面を登り縦走路に出る。キレット小屋には夜8時頃に着いた。5/4雨の中、キレットを越える。一部崩壊が激しく、懸垂を交えての通過となる。爺ヶ岳東尾根を下り、2000m台地で雨が降り出したのでツェルトを張る。5/5最後の急坂を過ぎると、鹿島集落の牧歌的な景色が目眩しかった。



富士山吉田大沢スキー滑降

1988年5月9日

メンバー 鈴木典仁

この計画は2～3年前に考えたものであったが、当時は技術的に未熟だった為、実行に移すことはできなかった。

5/8 22時、車で入山。スバルラインのゲート前で寝る。

5/9 6時にゲートが開き、30分で五合目に着く。天気は上々で、支度を済ませて7時に出発する。六合目の手前で吉田大沢を横切る。ここでこれから滑る雄大なバーンを仰ぎ見る。2月に偵察に来た時には雪はなく、分厚い氷が沢を埋めていたが、今は純白な雪面となっている。ここからは単調な登りが続く。途中4人のパーティと一緒にになり、雑談を交わしながら登る。八合目でアイゼンを付ける。5月だが雪は硬い。

昼過ぎに頂上に着く。晴れてはいるが風が強く、眼下は雲海

となっている。大休止後、久須岳と白山岳とのコルへ下り、スキーに履き変える。いよいよ滑降開始だ。目指す六合目は既に雲海の中だ。牛ヶ窪までが核心部で、この辺りの雪面はアイスバーンでエッジも効かず、ターンの度に7～8mは流される。牛ヶ窪で一息入れ、後は一気に滑り降りる。傾斜も落ち、雪質もいっくらか柔らかくなってきたのでバンバン飛ばす。八合目付近でホワイトアウトになり、右も左も分からなくなってしまう。七合目まで来るとガスは晴れてザラメ雪に変わり、非常に滑り易い。勢いあまって何度か転んでしまう。やがて雄大なバーンもやせ細り、雪田状になる。登山道が横切る辺りで雪は消えた。標高差1300m、直線距離3500mの大滑降は終わった。



### 硫黄尾根～槍ヶ岳

1988年12月28日～89年1月3日

メンバー 伊藤守、宮浦達也、小嶋豊、鈴木典仁、  
伊藤英世（水河山岳会）

12/28 6時大町市郊外の七倉に着く。詰所でお茶を戴き、目指す硫黄尾根へと向かう。高瀬ダムを越え、昼頃湯俣に着く。尾根末端まではすぐで、最初は樹林帯の急登、傾斜も落ちた森林限界に天幕を張る。12/29 小雪舞う中、出発。樹林帯を抜けると硫黄岳前衛峰が現れる。岩峰はP1～P9

まであり、P1は直下2mが悪い。P2は下りで20mの懸垂下降。P6から小次郎の科尔へ一気に下り、蛇行した尾根を登り返す。ヘトヘトになって硫黄岳に着くと、前方に硫黄台地が広がっていた。この台地の外れでビバークする。12/30今日は赤岳前衛峰群の通過だ。P6の下りで、40mの懸垂下降をする。湯俣川側を大きく捲き、P8の肩に達するルンゼを登る。肩から千丈沢側のルンゼを下降すると中山沢の科尔だ。全員が到着した頃には暗くなり、猛吹雪となった。12/31雪の為停滞。1/1新年は吹雪で始まる。赤岳主峰群を難なく越えると白樺台地だ。台地部分は短くブッシュのヤセ尾根となり西鎌尾根に出るが、ホワイトアウトで何も見えない。小休止後槍ヶ岳に向かう。吹雪の西鎌尾根は長く厳しい。槍の肩着17時。1/2 気温-17℃、風速20m。視界のきかない最悪の天気の中をヨタリながら進む。大喰岳で早くも道を失う。信用の置けない道を進む。中岳では枝尾根を下ってしまい、直下の雪壁を横切り夏道に出た。槍の肩を出て2時間半、横尾尾根の分岐に着く。ここを下るが、ドカ雪の為にラッセルが辛い。暗くなる頃、横尾に着いた。



### 利根川本流遡行合宿

1990年8月12日～15日

メンバー 伊藤守、鈴木典仁、伊藤英世（水河山岳会）

利根川は群馬県水上町と新潟県六日町の国境稜線の大水上山(1820m)を源頭として、関東平野を流下し298km先の千葉県・犬吠崎で、太平洋に注ぐ流域面積日本一の大河である。

タクシーで利根川本流入口、矢木沢ダムへ入る。登山道はダム湖の左岸にあり、半ばヤブ漕ぎをしつ

つ進む。道は悪く5時間程歩いた割沢出合先より今夏は渇水の為地肌が見えている湖岸を歩く。一時間程で湖の水が流動し始め、沢の形態になる。この時を待っていたとばかりに、沢に飛び込んだ。初日は水長沢出合付近で、行動を打ち切り設営する。翌朝、水が冷たいのでゆっくり出発する。沢は幾つか蛇行する中、シッケイガマワシを通過する。スノーブリッジは無く楽しい。井戸沢出合を過ぎ巻淵手前より本格的な泳ぎとなる。オイックイ付近でスノーブリッジをくぐるが、安定しているので不安はない。昼過ぎに裏越後沢出合に着き、早々にテントを設営。長い沢だけに、急がずが鉄則だ。朝からいきなり暗いゴルジュの中を泳ぐ、陰湿な所を早く通過したいが、流れもある為思うように進めない。魚止の滝は右岸より捲き、幾つかのスノーブリッジをくぐる。大利根滝上からは、幾らか落差のある滝が連続する。源頭も近いがあせらず登りたい所だ。稜線に近づくあたりから雨が降り出す。大水上山直下の三角雪田はすでに消えて無く、窪状の沢からガスにけむる稜線に出るあっけない幕切れであった。



### 谷川岳一ノ倉沢本谷～四ルンゼ（完全溯行）

1990年10月21日

メンバー 伊藤守、鈴木典仁、林英子（稜溪）

9月中央奥壁より眺めて本谷には僅かな雪のブロックがあるだけになり、10月には沢通しに登れると確信した。10/10、13は土合駅まで行ったが雨の為Uターンした。山では雪との話もあり、10年来のチャンスを逃すのではないかと心配する。朝、一ノ倉沢出合で明るくなるのを待つ。ヒョングリの滝は右壁を登る。テールリッジ基部を左に回り

り込むと、釜のある滝に出会う。水は冷たく腰まで浸かり滝を越える。続いて小滝、釜の連続となる。一ノ倉沢では普段「徒渉、へつり」とあまり使わない言葉が飛び交う中、沢が開けて二ノ沢出合に出る。ここから先は、狭いゴルジュとなる。その中の小滝を幾つか越えると「幻の滝」（20m）で奥が閉じられている。滝の左壁を登る（IV+）。これを越えると沢は開けスラブの滝が連続し、頭上に滝沢が大きい。スラブの滝はフリクションで抜きたいがツルツルの滑り台なので、適当な所から捲く。滝沢下部取付まで浮石が多い。この先、本谷バンドまでは各自好き勝手に登る。バンドよりすぐ上のF滝（10m）は直登し、F1を登り三ルンゼ出合を通り、F2と楽しい。F3チムニー滝（10m）は水流もなく左壁を直登（IV-）する。F4（30m）は右壁のバンドを登るが、落口手前で岩がかぶりA0となる。沢はここで開け、眼下に出合～本谷バンドと、今日のルートが一望できる。F5がどれかわからないままに草付帯に入り、一ノ倉尾根に出た。一ノ倉沢を沢登りの対象とした場合、ルートグレードは4級下（夜行日帰り）で、面白度☆☆☆☆（4ツ星）と言った所だろう。

### 最近七年間の遭難救助活動

当会が関係した救助活動は以下のようなもので、依然として谷川岳での活動が多い。近年の道具、技術の進歩をしても、自然の変化全てに対応するのはやはり難しいものである。また、最近の会員に関する事故は、骨折重傷者1名（西原）、軽傷者2名を出している。

遭難発生日	場所及び人数	遭難者及び当会救助活動者
1986. 8. 31 晴	谷川岳堅炭沢βルンゼ 負傷救出1名	東京星稜会 墜落 西原、伊藤、鈴木
1987. 3. 8 晴	谷川岳幽ノ沢ノコ沢 遺体収容1名、重傷救出2名	東京南稜会 墜落 伊藤、塚田、宮浦、小嶋、鈴木
7. 11～13 曇	剣岳池ノ平山 遺体捜索2名	個人 遺体捜索 西原、山口、伊藤、鈴木
1989. 5. 14 晴	丹沢谷太郎川鳥屋待沢右俣 遺体発見1名	個人 墜落 伊藤、鈴木
1990. 5. 12 晴	谷川岳一ノ倉沢 遺体収容2名	わらじの仲間 墜落 伊藤、鈴木、清水、伊藤（氷河）
12. 31 晴	穂高岳西穂稜線 負傷救出1名	川崎ヨチヨチ山岳会 墜落 山口、宮浦、鈴木
1991. 10. 20 晴	谷川岳一ノ倉沢 負傷救出1名	秀峰登高会 墜落 鈴木、伊藤（氷河）
1992. 6. 7 曇	奥多摩川苔谷火打石谷 救出1名	孤立救出 伊藤、清水、伊藤（氷河）

## 朝霧 60年の主要山行

1948年7月	一ノ倉沢二ノ沢左俣本谷αルンゼ	齊藤、鈴木、前野他2名
1949年4月	地域研究「武甲山北壁」発表(山溪122号)	齊藤、鈴木、谷口他7名
5月	玄倉川向山沢大滝初登攀	伊藤正、鈴木政、八木
6月	谷川岳南面岩登合宿	夏井、杉本、渥美 他15名
1950年1月	浅間山冬山合宿	齊藤、渥美、奥村 他22名
1951年6月	佐梨川奥壁	坂口伊助、吉越
1952年1月	遠見尾根 五竜岳	齊藤、奥村、坂口他5名
8月	剣岳合宿	谷口、佐藤、行貝他5名
8月	一ノ倉沢集中	前野、明珍、佐藤他6名
1953年6月	一ノ倉沢集中	奥村、明珍、行貝他8名
	地域研究「越沢バットレス」開拓、発表(山溪167号)	齊藤、伊藤、渥美、他12名
1954年8月	穂高岳滝谷全ルート登攀合宿	尾崎、佐藤、坂口、奥村他11名
	雲龍谷アカナ沢奥壁	坂口、奥村、横山、高橋
1955年1月	鹿島槍東尾根	坂口、杉本、齊藤、小黒
1957年2月	一ノ倉沢東尾根積雪期第2登(単独初登攀)	吉尾
3月	一ノ倉沢滝沢積雪期初登攀	原田、吉尾
4月	一ノ倉沢二ノ沢本谷積雪期初登攀	小島、吉尾、阿部
8月	穂高岳屏風岩集中(中央カンテ岩溝ルート開拓)	山口、吉尾、坂内、阿部、佐藤、奥村
	前穂高岳2・3峰間リンネ初登攀	稲越、奥山
9月	明神岳下宮川谷奥壁初登攀	大西、他RCCII
1958年1月	北岳バットレス中央稜積雪期初登攀	吉尾、他RCCII 4名
	幽ノ沢奥壁ルンゼ積雪期初登攀	山口、田中、佐藤、後藤、齊藤
3月	剣岳チンネ正面壁積雪期初登攀	吉尾、田中、芳野
4月	北岳バットレス第4尾根積雪期第3登	稲越、田中
	一ノ倉沢烏帽子奥壁変形チムニー積雪期初登攀	山口、吉尾
12月	穂高岳屏風岩中央カンテ積雪期初登攀	吉尾、他RCCII 3名
1959年2月	一ノ倉沢コップ状ルンゼ積雪期第2登	吉尾、阿部、外村
3月	幽ノ沢中央壁積雪期第2登	田中、佐藤
1962年7月	一ノ倉沢衝立岩正面壁左フェース開拓 (中央稜第2朝霧ルート)	梶山、星、大川原
1963年5月	地域研究「五竜岳東壁」全ルート登攀合宿	遠藤、海老原、福岡他
7月	剣岳ハツ峰六峰Cフェース朝霧ルート開拓	稲越、梶山
1964年5月	北岳バットレスピラミッドフェース開拓	梶山、青木
1965年3月	後立山連峰積雪期全山縦走	海老原、青木、三浦他
1966年9月	北岳バットレスピラミッドフェース初登攀	海老原、青木、三箇
1967年7月	ヒンドゥ・ラジ イーカイ・ゾム峰遠征	海老原他
1968年7月	コーカサス ウシバ峰遠征	福岡他
1971年8月	インドヒマラヤ ハヌマンティバ峰遠征	高山、海老原(政)他
12月	北岳バットレスピラミッドフェース積雪期初登攀	庭野、西原
1976年7月	カラコルム バインターブラック峰遠征	西原、植田、吉田、山口、村島、鈴木
1978年1月	剣岳集中合宿(小窓尾根、早月尾根)	植田、西原、吉田、山口、鹿目、川内
1979年1月	剣岳ハツ峰三稜～主稜～小窓尾根下降	植田、鹿目、川内、渥美、小島

※最近12年間の山行を除く

## これからの朝霧について

エコロジー、地球にやさしくという言葉が、新聞やテレビで近頃良く使われるようになってきた。我々が何気なく使い捨てている二酸化炭素やフロンなど生活廃棄物が、地球温暖化の大きな原因になっていると言う。そう言えば冬山は年々雪が少なくなり、雪山は年毎にその厳しさを和らげているようだ。

若者の置かれている環境も、随分と変わってきた。昔は若者と言えば、「金が無い、暇が無い」と言うのが当たり前であったが、現在では「金と暇に恵まれて」遊ぶことには事欠かないという若者も増えてきている。このことは若者の指向にも大きな影響を与え、今までの内面的で一徹な趣味的色合いの強い遊びは影をひそめ、反対に個性的で派手なファッション性、レジャー性に富んだものが人気を集めている。その為、若者自体も次から次へと変わる遊びに影響を受け、多様化してきている。また流行りの遊びに乗り遅れない為のレジャースクールが盛んになっている。

当然、山の世界にもこの傾向は波及し、地味で苦しい山岳部的なスタイルの登山は敬遠され、ハードフリーやアイスクライミングのような、よりスポーツ的で洗練されたスタイルのものが好まれている。また余暇の普及による中高年登山者の増加と相俟って、同好会的、登山スクールの登山も人気を集めている。

しかし本当に、自然の厳しさはそれほどまでに甘くなってしまい、そして登山の魅力もそれにつれて減じてしまっているのではあるだろうか。先輩達の初登攀、初登頂とは、時代に恵まれた栄光であったのだろうか。・・・否である。決してそんな事はない筈である。

我々は山登りの何かを忘れ始めている。その時代その時代には、その時代その時代の初登攀、初登頂が、必ずあるからである。

幸か不幸か現在の我々には、過去にはとても考えられなかった「金、時間、用具、情報」と言う大条件に恵まれてきている。これらの組み合わせによって、登山のパターンは画期的に広がった。しかし我々には、これらの条件が生活レベルの向上に伴ってジワジワとやってきた為に、ごく当たり前の事としか映ってこない。その為に通常の行為では、行為の先に何かがあるのが容易に見極められてしまうのである。そして、それが行為を簡単なもの、容易なものと感じさせる一因となっている。能力によるのではなく、環境、条件によるものであるという事を忘れてしまっている。

自分で計画を立て組織を作り自分の力だけで実行して見ると、国内登山でも海外登山でも、そこには判らない事、難しい事ばかりである。しかし現代の我々は、合理的、効率的と言うことに目を向け過ぎて、効果の上がないもの、成果の出ないものはとかくつまらないものとして片付けがちである。本来が遊びである登山の中でさえ、効率的にハイライト的なものを追い求めてしまうのである。HOW TO 的に、安直に、おいしい所だけを望んでしまうのである。しかしそうして手に入れた満足には、長続きしないものが多い。簡単に失ってしまうものである。我々が長い時間をかけ、苦勞して手に入れたものは、必ずしっかりした何かを残してくれている。我々にとって行為の先が容易に見えてしまうのは、ただ行為の先が見えない所までのチャレンジをしていないからだけなのである。

朝霧の60年という歴史は、決して一枚岩の順風満帆なものではなかった。何度も何度も一から出直しの努力を繰り返した。しかしそれが今日まで朝霧が存続している理由なのである。どんな時代どんな状況においても「新たな朝霧を創造する」という朝霧マインドを持ち続けて行きたい。60年という大きな節目にあたってそれらを心にとどめて、「これからの朝霧」はこれからのリーダー会に委ねたい。

〈植田記〉

## 編集後記

2 / 末にOB会に出席して、60周年記念誌を出したいと言う話を聞かされてから約半年。2回の遠征の記録も満足に出せなかった我々が本作りを始めたのは、「50周年記念誌の時は遠征で逃げたのだから、今度はお前達がやれ！」と言う先輩達の厳しい一言であった。

どだい自分で原稿を書くのさえおぼつかない我々が、他人に原稿を書かせて、それも校正、編集、割付、そして挙げ句の果ては予算がないのでタイプまで何とかできないかというのだから、もうそれこそ山岳人になって以来の大騒動となった。それにことに、ここで逃げまどったりして醜態でも演じようものなら、それこそ今の若い者に示しが付かないということ等もあって、やむなく無骨い指をパソコンに載せて、毎晩仕事が終わってから原稿の清書打ちに励むことになった。しかしいくらやってもワープロ打ちは馬鹿らしくって、なじめない。「山屋ッテェのは、なんでこう字や文章がヘタな野郎ばっかしなんデェ、まっちゃん字ッテェものが書けネェのか、このうすらとんかちの大馬鹿野郎メェガァ！・・・テメェーでヤレ、テメェーデェ！」と八つ当たりする毎日であった。しかしそのうちに旨い掃け口を見つけた。編集の特権である、原稿集めである、原稿催促というのは、半ば脅しみたいなもので、痛快なものである。特に普段は、ああだこうだと理屈を付けて口うるさい者に対して、「原稿なんてテェものは、簡単でいいんだァ。1日、2日もあればァ、すぐに書けるだろォ。」と言ってプレッシャーをかけるのは、誠に小気味良く、楽しい。しかし、そのツケは直に自分に回ってきた。原稿用紙まで作って字数を指定して渡したのに、字数を無視した原稿が多いのである。字数が多い分には、とにかくカットしてしまえば、それで良いのだが、足りない原稿はどうしようもない。特に登っていないルートや海外の山行等は悲惨だった。すっかり仇を取られてしまった。

しかし今日、最後に追加になったこの原稿を書いて、僅か20ページそこそこでも、本作りの大半を終えたかと思うとやはりうれしい。原稿を書いてくれた皆さん、60周年記念式典実行委員会の皆さん、特に力を入れて頑張ってくれたOB会の皆さん、そして最後に編集委員の皆さん、御苦勞様でした。最後に今回の60周年記念式典に参加できずに他界したOB会の夏井健之（享年68才）、齊藤勝長（享年62才）の両先輩に哀悼の意を表します。

発 行 1992年9月27日  
発 行 者 東京朝霧山岳会  
編集委員 西原正、植田宗男、山口秀男  
鹿目紹夫、伊藤守  
発 行 所 東京朝霧山岳会60周年記念式典実行委員会  
東京都江戸川区平井6-7-5  
TEL 03-3613-2817

表紙/ボィオハグール・ドゥアン・アシール峰  
ウラ/剣岳ハッ峰(上), 谷川岳ノ倉沢(下)  
P 2, 3 一部写真/江戸川区の昭和史より転載



